HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学附属図書館報「楡蔭」
Citation	, 103, 1-11
Issue Date	1999-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66393
Type	periodical
File Information	yuin103.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ISSN 0917-3684

Hokkaido University Library Bulletin No.103 Mar. 1999

楡蔭

Yuin 北海道大学附属図書館報

目　次

北分館が情報環境図書館へとリニューアル
　附属図書館北分館長　吉野　悦雄……1
日米両国におけるドキュメント・デリバリー・サービスの改善に関するラウンドテーブルに参加して
　情報システム課　星野　雅英……4
ニューヨーク大学とデラウェア大学の図書館にて
　情報サービス課　片山　俊治……6
お知らせ
・医学部図書館，歯学部図書室にBDSが設置されました……10
・北海道大学図書館講演会が開催されました……10
資料紹介
・矢田俊隆名誉教授の蔵書の寄贈について
　法学部教授　田口　晃……10
・教官著作寄贈図書……11
会議……11

北分館が情報環境図書館へとリニューアル

附属図書館北分館長　吉野　悦雄

平成11年度に北分館がおおきく変わります。インターネット環境に対応し，映像・音声情報の閲覧設備が大幅に改善します。附属図書館本館や学部図書室の将来のありかたについても参考になろう点が多いかと考えますので，少し詳しくご紹介したいと思います。

インターネット環境と学習図書館

低学年次対象の学習図書館にインターネット環境は必要ない，どうせサーフィン（さまざまなホームページを波乗りのように数秒ごとに流し読みで移っていくこと）をするぐらいだろうとお考えの方もおられるのではないでしょうか。また文系の研究や学習には本と雑誌で十分ではないかと思っておられる方も多いのではないでしょうか。

そのような方のために，二つだけ例を挙げましょう。農林水産省はそのホームページで，各種審議会の議事録や地方公聴会の記録を公開しています[1]。農業政策の決定過程が国民に対して公表されています。岩見沢で農業を営むＡさんや北海道大学教授のＢさんがどのような発言をされたかが確認できます。このような情報は，以前から活字にはなっておりましたが，関係者のみに配布されるものであり一般には公開されていませんでした。ましてや大学図書館はこれら資料を収集することはできませんでした。農業政策や日本農業論を学ぶ学生にとって，レポートや卒業論文を作成する際に，このホームページは必見のものとなってい

ます。インターネットは，あれば便利という段階を越えて，なければ研究できないという段階になっています。文系の研究者や院生・学生にとっても理系と同様にインターネットはライフラインとなっています。

この記事がみなさんのお手元に届くころには，新聞紙上で，1月1日時点での公示地価が公表されているでしょう。札幌市北区北〇条西〇丁目が何万円と公表されます。国土庁のホームページ[2)]は，これら調査地点のすべてについて，例えば札幌市の場合ならば575地点のすべてについて情報を公開しています。直面する道路の幅など詳細な情報が物件ごとに得られ，現場見取り図まで画面上に現れます。地価動向を研究する学生にとっては必需品でしょう。研究は別としてご自宅周辺の土地価格に興味のある方もぜひ覗いて下さい。

情報環境個人閲覧ブースの設置

このように学生にとって，インターネット環境は本や雑誌と並んで不可欠の情報ソースとなっています。北分館では平成10年度から三階開架閲覧室にインターネット端末を設置し，学生の学習をサポートしてきましたが，平成11年4月からは，さらに四階に16台の情報環境個人閲覧ブースを設置します。これは肩ほどの高さのパネルで仕切られた個人ブースです。持ち込みパソコンを置いたまま書架に本を探しに行けるようにドアに鍵がかかります。もちろんAC電源とインターネット接続コンセントを用意します。先日の学生実態調査でも，「学生にも個人閲覧室を使わせてほしい」という希望が寄せられていました。静粛なスペースで，情報環境のもとで集中して勉強したいという学生の気持ちは良く分かります。このような勉学熱心な北キャンパス学生・院生の学習を北分館は全面的に支援したいと考えています。

北分館四階の現状のスペースでは，情報環境個人閲覧ブースは16台の設置が限界ですが，平成12年度以降において四階の改築にかかわる概算要求が実現されれば，情報環境個人閲覧ブースを70台程度まで拡充したいと考えています。このような試みは，全国の国立大学図書館のさきがけとなるでしょう。

映像・音声情報と学習図書館

『北大時報』2月号の記事にもありますが，平成10年度に『ビデオで学ぼう理科科目』というプロジェクト（総長裁量経費）が北分館で実施されました。これは入試で選択しなかった理科科目を大学で履修するに際して，その知識の補習をビデオ教材を利用して自学自習で行ってもらおうというプロジェクトです。映像・音声資料は，著作権法上の制約から，実質的には図書館内部でしか閲覧できません。ここにおいて大学図書館が学習支援に寄与することが求められています。

北分館では100本以上のビデオ教材を新たに購入しましたが，閲覧数が飛躍的に伸びるなど，大きな効果を挙げたと自負しています。近年の学生にとって，まず目で見る，耳で聞くということが魅力的なイントロダクションになっているようです。

さらに，最近では，CD-ROMによるバーチャル実験ソフトも開発されています。これは質量や温度などの定数をパソコン上で入力すると，その実験映像が画面上に現れるというもので，理科教育における自学自習には極めて有効なものと思われます。北分館でもこれを備えました。

マルチメディア端末公開利用室の設置

平成11年度の年度末には，北分館の隣に，放送大学学園との合築建物として建設される総合メディア交流棟がオープンします。その二階のかなりの部分が北分館二階と渡り廊下で連結され，北分館と一体として利用に供せられます。そこではコンピュータ自習コーナーを含むマルチメディア端末公開利用室が新たに設置され，合計で100台近いコンピュータ機器とビデオ機器が設置される予定です。

学生は，北分館所蔵のパソコン・ソフト解説書やCD-ROM，ビデオ資料・LL資料を用いてこのフロアーで学習することができます。既に述べた

著作権法の制約を，図書館がこのようにスタンドアロン環境を整備することにより，乗り越えることができました。

印刷活字情報の重要性と電子図書館環境

今まで述べたように新しい時代に対応した情報環境が重要であることはいうまでもありませんが，しかし，本や雑誌など従来型の文字情報が大学図書館の利用の主体であることは今後とも変わりがないでしょう。豊富な教科書や参考書が簡単に利用できる環境を整備する必要があります。

そこで，北分館は平成11年4月より，二階の開架閲覧室と三階の閲覧室を統合します。三階閲覧室は今までは書籍が置かれていませんでした。学生は二階から本を探して三階に昇って閲覧していました。これからは三階にも約半分の開架書庫を設置して，学生がみぢかに本を探せるようになります。開架の書籍数も増加しました。

また平成10年度から既に実現していることですが，二階と三階の開架閲覧室には，従来からの図書検索専用パソコン端末（OPAC）のほかに，インターネットに接続したパソコン端末18台と，持ち込みパソコン用インターネット接続コンセント6個が設置されます。これらにより，北分館の二階から四階までの3つのフロアーと総合メディア交流棟の2階のフロアーが情報環境対応フロアーとなります。

図書館業務の効率化と利用環境の改善

本学では従来から，利用者サービスの向上と業務の効率化のため，図書館本分館に限らず図書業務の機械化への取り組みを行ってまいりました。

北分館では平成11年4月より，自動貸出装置を導入します。これはスキャナー装置のようなもので，利用者が借りたい本を装置に置き，磁気カード型の図書館利用証を差し込むと機械が自動的に貸出処理を行ってくれます。最近の学生は，他人と対面することを避ける傾向がありますが，図書館職員の手をわずらわせることなく利用者はより気軽に本を借りることができます。さらにこのシステムの導入により業務が効率化され，図書館利用者案内などのサービスの一層の向上にもつながります。

社会に開かれた図書館の実現

高度情報化社会とせまりくる高齢化社会の中で生涯学習の重要性はいよいよ高まります。これからの大学図書館は社会に対しても開放されることをより強くもとめられていくことでしょう。

既に述べましたが，北分館の隣に放送大学学園が移築されます。多くの社会人が総合メディア交流棟と北分館を訪れることになるでしょう。

北分館では平成11年4月より自動入退館装置を導入します。これは地下鉄の自動改札機のようなものと考えてください。これからは学外利用者に対して，図書館職員が身分証明書や紹介状を逐一チェックすることなく，磁気カード（図書館利用証）を発行して気軽に利用していただきたいと考えています。また学内利用者にあっても入退館がよりスムースに行われるようになります。

おわりに

このように北分館は，学内外のご支援を得て，大きく変わりつつあります。情報環境図書館や開放型図書館などの新しい機能がさらに充実されます。従来どおり全学教育対象の低学年次学生への学習支援を中心に置きながら，北キャンパスの学内利用者，放送大学学生へとサービスの対象を広げていきたいと考えています。

（よしの　えつお）

注1）農林水産省のホームページ・アドレスは
http://www.maff.go.jp

注2）国土庁のホームページ・アドレスは
http://www.nla.go.jp

日米両国におけるドキュメント・デリバリー・サービスの改善に関するラウンドテーブルに参加して

情報システム課　星野　雅英

1. はじめに

日米文化教育交流会議（CULCON）の情報アクセス・ワーキンググループでは，平成10年6月の会議で，「日米両国間の図書館，情報サービス機関のドキュメント・デリバリー・サービス（文献提供サービス）の改善」を提言した。

それを受けて，国立大学図書館協議会，国公私立大学図書館協力委員会の共催で，日米相互の図書館の実務担当者を中心とした，標記のラウンドテーブルが，平成11年2月8－10日に東京で開催された。

北大から原館長と星野が出席したので，その報告をしたい。

米国はNCC（National Coordinating Commitee on Japanese Library Resources）の責任者をはじめ日本語資料を扱っている大学図書館等から7名，日本は国立大学図書館協議会・国際情報アクセス特別委員会，国公私立大学図書館委員会等（東大，北大，千葉大，一橋大，東工大，学芸大，都立大，慶応大，学術情報センター，文部省等）から20名参加した。

2. ラウンドテーブルの概要

主な内容は次の通りであった。詳細は，国立大学図書館協議会のホームページに近く広報される予定なので，そちらをご覧いただきたい。

1）オープニングセッション

ラウンドテーブル開催の経緯，会議の位置づけと大学図書館サービスの現状，米国における大学図書館サービスの現状について，3名から説明と報告があった。

2）第1セッション：ドキュメント・デリバリーサービスのあり方

日本及び米国におけるドキュメント・デリバリー・サービスの現状と課題について3名から報告があり，質疑や意見交換があった。

3）第2セッション：日米における相互の学術情報アクセスへのニーズ調査分析結果

日本の図書館・研究者の米国へのニーズ調査結果，日本語情報に対する米国研究者のニーズについて，それぞれ報告があり，質疑や意見交換があった。

日本の調査は米国語情報のニーズ調査ではなく，米国の文献全般に対するものであり，米国の調査は日本語情報に対するニーズ調査であることに日米の大きな違いがある。

日本の研究者に対するアンケート調査では，「米国に文献複写等を依頼した」が26％，「図書館で対応してくれれば利用したい」が22％，「必要がない」が51％であった。「必要がない」が多いのは，英国のBLDSC（文献供給センター）への依頼が国内と同様に比較的簡単にできること，外国雑誌センター館が設置され米国の雑誌の多くは国内で間に合うということ，等が大きく影響していると思われる。

米国からの報告では，従来は特定の大学の研究者が特定の分野の資料を必要としたが，最近は，大学も分野も広がり，日本語を学習する学生のニーズも高まり，もはや，「日本研究」が特殊なものでなくなってきているという興味深い指摘があった。

4）第3セッション：文献画像システム

日本，米国の現状についての報告の後，東大で開発中の文献画像伝送システムのデモンストレーションがあった。その後，質疑や意見交換があった。

技術的には細かい課題はあるものの，日米間のコピーの送付は，郵送でなく，文献画像伝送シス

テムを使って送付できる可能性が高いことが再確認された。

5）第4セッション：日米間のドキュメント・デリバリー・システム実現のための今後の課題

日本における相互利用規約の現状と今後の展開の予定，日本における解決すべき諸課題，日米間相互接続の拡大について，それぞれ報告と提案があり，質疑や意見交換があった。提案については，総括セッションで協議された。

6）第5セッション：日本語情報データベース（コンテンツ及びカタログ）に関する意見交換

日本における日本語情報データベース構築と利用の現状，米国における日本語雑誌情報のWebでの構築と提供の試みについて，それぞれ報告があり，質疑や意見交換があった。

7）総括セッション

日米間のドキュメント・デリバリー・サービス改善の具体的アクションプランが，日米双方で提案され，協議の結果，次のことを試行的に行うことが決まった。

a）日本の国立大学5館，米国図書館10館の間で，ILL（図書館間相互貸借）を実際に行う。

b）試行期間は平成11年7月から12年3月とする。

c）文献のコピーは，郵送でなく，文献画像伝送システム（／電子メールのファイル添付機能）を使って行う。

d）経費は，試行期間は日米間は無料とする。今後，料金支払い・決済方法については日本で検討する。

e）ILLシステムの日米間相互接続については，学術情報センターに要望する。

3. ニーズ調査の結果から

北大で担当した米国へのニーズ調査では，研究者から日本の大学図書館に対し，国際的なILLに対応する図書館側の窓口をきちんと設置し広報を行うべきであるというような要望と期待が寄せられた。また，海外への料金支払いがなぜ図書館を通して簡単にできないのか，ILL手続きはもっと簡素化し迅速化できないのかというな指摘も少なくなかった。米国に対して米国の大学図書館全体のOPAC（オンライン目録）の構築と提供を求める声が多く，また，日米に双方に対しILLシステムの日米間相互接続を求める声が少なくなかった。

ニーズ調査の結果と分析の詳細については，別途「大学図書館研究」等に発表したい。

4. おわりに

どのセッションも，理想的なことより現実的で具体的な内容が多く，予定時間をオーバーするほどの活発な意見交換があり，日米相互に理解を深めることもできたと思う。また，この会議が実り多いものとなったことを，会議に参加した一人としてうれしく思っている。さらに，今回のラウンドテーブルが，日米間のILLの大きな進展のきっかけとなればと願っている。

ニューヨーク大学とデラウェア大学の図書館にて

情報サービス課参考調査掛　片山　俊治

はじめに

北海道大学国際交流事業基金により，平成10年9月15日から10日間の日程で，米国のニューヨーク大学とデラウェア大学の図書館を見る機会を与えられた。

私の所属する掛では，平成9年度から，利用者が図書館サービスを有効に利用するための支援プログラム（以下，図書館利用教育サービス）の一部を担当しているが，今回の渡航は，その業務に関係する部門の視察が目的であった。

この拙文は，その時の体験を通して感じたことなどを綴ったものである。

ニューヨーク大学　ボブスト・ライブラリー（The Elmer Holmes Bobst Library）

ニューヨーク大学は，1831年の創立で，15のカレッジやスクールを有し，学生数5万を数える私立のマンモス大学である。キャンパスは，ニューヨーク市マンハッタン島南部のグリニッチ・ビレッジにある。都会特有の喧燥で開放的な雰囲気の中，ワシントン広場と隣接して大学校舎のビル群が立ち並ぶ。ニューヨーク大学のメイン・ライブラリーであるボブスト・ライブラリーは，通りをはさんで，ワシントン広場と向き合う地上12階，地下2階のレンガ色をした立方体の巨大なビルである。大学には他に8つの図書館がある。

建物に入って，まず驚かされるのが，10階の高さまでの吹き抜けである。さながら大聖堂の荘厳な空間を思わせるつくりだ。次にびっくりするのが警備の物々しさである。入口を入ったすぐ脇に制服を着た警備員が数人立っている。その先には，さらに入館ゲートがあり，係員が常駐して自由に進入できないようになっている。

さて，約束の時間になっても相手らしき姿が見当たらない。入館ゲートのデスクにいる係員に相談すると，電話番号簿を指して相手のオフィスに電話するように言われる。電話をかけても誰もでないので困っていると，約束の相手と思われる女性が現れた。典型的な東洋系の風貌が幸いして，日本からの訪問客が私であることにすぐに気がついたらしい。急な用事が入って約束の時間に遅れたことを謝りながら，素敵な笑顔で話しかけてきた。この女性がボブスト・ライブラリーで利用教育サービスを担当しているマリーベス・マッカートゥンさんである。彼女は，私をまず自分のオフィスへ連れて行き，それから建物の中を案内してくれた。

1階のフロアで説明を受けていると，最初に通った入館ゲートの向こう側に学生らしき利用者が10数名，一列に並んでいる。何事かと思って尋ねると，退館ゲートで所持品のチェックをしているのだという。当然，無断持出防止装置であるブック・ディテクション・システム（以下，BDS）が導入されていると思っていたので，不思議に思って尋ねると，BDSをは導入しているが，それだけでは十分じゃないから，という返事だった。BDSを設置すれば，わざわざ人手を使ってチェックする必要はないだろうと思っていたので，ちょっと

驚いた。

後になってわかったのだが，この図書館だけが退館時の所持品検査をしているわけではなく，他の図書館でも同様の経験をした。所持品検査は，米国の図書館風景として一般的に認知されているのかもしれない。もっとも，空港でのチェックほど厳しい感じはなく，どちらかといえば，心理的な効果を狙った，やや形式的な感じのする検査であった。

マッカートゥンさんは，Instructional ServicesのHeadという肩書きを持つ。このサービスを担当しているスタッフの人数を尋ねると，1人だという。思わず「ひとり？」と聞き返してしまった。そこで組織的な背景を説明してもらった。どうやら，このポストは3年ほど前に新設され，彼女が初代の担当者だそうだ。図書館利用教育サービスに関する企画，調整，広報，準備等の作業が，彼女の仕事である。ただ，関連するすべての実務を独りでこなしているわけではない。図書館オリエンテーションや基本的な文献探索法については，彼女自身が担当しているが，専門分野については，25名ほどいるサブジェクト・スペシャリストと呼ばれるライブラリアンが分担している。

このサービスを支援する施設・設備は充実している。プレゼンテーション用のAV機器類を常設した30～40名ほど収容できる部屋が2つある。この他に，パソコンでの実習が可能な部屋も利用できる。

ついでながら，インターネットが利用できるX端末は別に用意されている。この設備は授業期間中であれば，24時間利用できる。25台の端末は満杯で，7～8人の学生が順番を待って並んでいた。

彼女の話から，その夜，自由参加の図書館オリエンテーションを開催することがわかった。せっかくの機会なので頼んで参加させてもらうことにする。プレゼン用の機器を操作しながら，彼女が説明するという形式のものであった。男女合わせて10名の学生が参加している。説明の途中でも参加者から活発に質問が出され，その都度，彼女は丁寧に答えていた。数えてみると15の質問を受けていた。1時間の説明が終わり黒板を拭いている彼女に，いつもこんなに質問が多いのかと聞いたら，今日は特別だという。この企画は，教官からの依頼で授業の一環としても開催しているが，授業でやる場合，学生はとても静かだといって笑っていた。図書館利用教育サービスにおいては，参加者へのインセンティブの与え方が，学習効果に大きく影響するといった指摘を思い出させる話であった。

デラウェア大学　モリス・ライブラリー（The Hugh M. Morris Library）

デラウェア大学は，その名が示すとおりデラウェア州にある。デラウェア州は，米国東部の小さな州である。デラウェアといえばブドウを連想しがちだが，ブドウの品種名であるデラウェアは，オハイオ州デラウェアに由来する。また，この州は会社設立の手続きが簡便なことで知られ，日本のベンチャービジネス界などでも注目されている。デラウェア大学のキャンパスはデラウェア州北部のニューアーク市にある。ニューアーク市は，地図上でニューヨークとワシントンD.C.を結んだ線のほぼ真ん中に位置し，人口2万5千人ほどの地方都市である。大学としての創立は，1833年で，10のカレッジを持ち，学生数が2万人ほどの州立の総合大学である。

今回訪問したモリス・ライブラリーは，デラウェア大学のメイン・ライブラリーである。キャンパス中央部の緑に囲まれた落ち着いた環境にあり，

地上3階，地下1階のやや平たい感じのする白っぽい建物である。なお大学には他に4つのブランチ・ライブラリーがある。

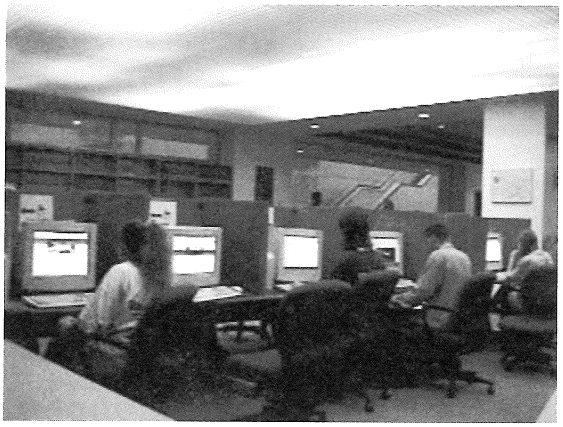
約束していた時間に図書館へ入ると，すぐに一人の女性が近づいてきた。20人ほどのスタッフをかかえるレファレンス部門のボス，シャーリー・ブランデンさんである。今回の訪問では大変お世話になった方である。彼女はレファレンス・デスクにいた同僚に私を紹介した後，館内を案内してくれた。

館内をまわりながら，日常でもなじみのある図書館らしい静寂さを感じた。それで何気なく「静かですね」と言うと，その日は早朝に雨が降ったりして，天候がよくなかったこともあったせいか，「天気が悪いと利用者が少ないんですよ」と笑いながら話してくれた。利用者がひどく少ないというわけでもなかったが，図書館の入館者数が天候に左右されるのは，米国でも同じようだ。

デラウェア大学において，研究資料を充実させるために1958年に設立されたというライブラリー・アソシエイツの40周年記念事業として，ちょうど展示会が行われていた。館内に，北大図書館でいえば北方資料室といった感じのSpecial Collections Departmentという部署があり，そこの展示室で古典的名著や米国文学作家の初版本などの貴重図書が公開されていた。

見学が終わってから，あなたの聞きたいことは彼女が答えてくれるでしょう，といって紹介してくれたのが，パトリシア・アーノットさんである。彼女は，レファレンス部門において，教育学関係の主題を担当するライブラリアンであると同時にLibrary User Education ProgramのCoordinatorという肩書きも持っている。その後，彼女のオフィスで話を聞くことになった。彼女はいかにもベテランという感じのするライブラリアンである。図書館利用教育サービスに携わってから15年くらい経つというから，このサービスがしっかりと定着していることを窺わせる。授業で図書館の利用方法について講義をしているということで，その時に使用したテキストを見せてくれた。

館内には，セミナー用の部屋が設けられており，プレゼン用の機器と演習用のパソコン数台が置かれていた。



マネジメント

米国図書館の現場を見ながら，強く感じたのは，分業システムの徹底した採用である。たとえば，利用者へのサービスポイントとなる窓口を数えると，ニューヨーク大学のボブスト・ライブラリーが13箇所ほどで，デラウェア大学のモリス・ライブラリーは9箇所ある。ここまでの分業が必要かどうかについては，利用および管理の両面から議論の分かれるところであろう。単純な比較はできないが，北大図書館本館の例では，総合カウンター，レファレンスやILLに北方資料室を合わせて4箇所である。それでも日本国内では恵まれている方かもしれない。そうした状況を，1階フロアだけで5箇所のサービスポイントを持つニューヨーク大学ボブスト・ライブラリーで紹介すると，案内してくれた担当者は，ここまで分けなくてもよいかもしれない，という云いかたをしていた。分業化が各サービスの質的向上と量的拡大への誘引となるメカニズムも見落とせないが，フルタイム換算したアルバイトも含め380人近いスタッフを抱えるボブスト・ライブラリーだから可能ではないかと，うらやましさも含め，思わずいいたくなる気持ちは否定できない。もっともそういう組織を築き上げてきたのも，米国ライブラリアンの努力の結晶でもあるのだが。

図書館利用教育サービスへ話を戻す。ニューヨーク大学にしてもデラウェア大学にしても，図書館利用教育サービスの実施にあたっては，まず中心となる担当者を配置する。その人物に対し，図書館が持つ様々な資源をコーディネートすることができる権限を与えて実行させる，という手法を採用している。担当者へのポストの与え方が2つの大学で異なるが，機能的には似ている。

なお，それぞれ時期がずれるが，図書館利用教育サービスの実績を紹介しておく。

ニューヨーク大学図書館が，1994－1995年にかけての実績（1年分）で，開催回数は293セッション，参加者数は延べ5,656名である。（ボブスト・ライブラリーのみの数字）

デラウェア大学図書館は，1997－1998年にかけての実績（1年分）で，407セッション，参加者数は延べ7,901名となっている。

ちなみに，北大図書館での1998年度実績は，実習主体の小人数（10名程度）を対象にした企画へのこだわり，という理由もあるが，約50セッション，参加者数は延べ約400名である。

図書館は図書館

図書館利用教育サービスへの取り組みにおいて，米国の大学図書館はかなり先行している。日本でも，ずいぶん前から大学図書館における図書館利用教育サービスの必要性は論じられてきた。しかしながら，一部の先進的な大学を除いて，実際に大学図書館が組織的，計画的に，このサービスに取り組み始めたのは，ここ数年のことではないだろうか。この動きが，インターネットや電子メディアの普及に伴って生じてきた情報リテラシー教育に対する要求と重なることはもちろんである。それと同時に，これまで行われてきたパブリシティ活動に比べ，図書館利用教育サービスが，利用者に対し，さらに積極的な図書館サービスへのプロモーション機能を果たすという面での再評価も，この動きの背景として読み取ることができるかもしれない。この傾向は，今後，図書館サービスへの期待感（すぐに失望感に変わる脆弱なものかもしれないが）と共鳴しあい，徐々にではあるが，増幅していくように感じる。

振り返れば，図書館におけるマネジメントやマーケティング面での日米の違いを感じて落胆したり，なんだ同じようなことをやっているじゃないかといってホッとする場面が交錯する旅でもあった。この拙文で紹介した図書館以外にも4つの図書館を見学することができた。その結果感じたのは，確かに，米国の図書館が利用者へ積極的に働きかけているサービス活動から学ぶべき点は多いということである。しかしその一方で，図書館が持つ資源や環境の差を考えれば，われわれだって捨てたもんじゃない，と感じたのも事実である。もちろん，まだまだ取り組まなければならない課題は多いし，問題を解決する努力は必要だが，そういった気持ちを持ち帰ることができたというのが，私にとっては大きな収穫であった。

感謝をこめて

最後になりましたが，この機会を与えてくださった関係者の皆様，ならびに出張中しっかり現場を守ってくれた同僚に感謝いたします。

なお，ここで紹介した大学図書館のホームページ・アドレス（URL）を以下に記します。興味がありましたら，ご覧になってみてください。

ニューヨーク大学ボブスト・ライブラリー
http://www.nyu.edu/library/bobst/

デラウェア大学モリス・ライブラリー
http://www.lib.udel.edu/

お知らせ

医学部図書館，歯学部図書室にBDSが設置されました

医学部図書館，歯学部図書室では平成11年3月，BDS（Book Detection System：図書不正持ち出し防止装置）を設置しました。これにともない，閲覧室内へのかばん，私物などの持込が可能となりました。

正規の貸し出し手続きを行っていない資料を携帯したまま館外へ出ようとすると警報が鳴り，出口バーがロックされますので，かならず貸し出し手続きを行ってから退室してください。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

北海道大学図書館講演会が開催されました

平成11年1月28日(木)附属図書館会議室において，北海道地区大学図書館協議会との共催による道内国公私立大学等の図書館職員を対象とした，北海道大学図書館講演会（平成10年度第2回）及び北海道地区大学図書館協議会講演会（平成10年度）が開催されました。

秋田大学附属図書館図書館専門員戸嶋勇氏による「図書館の先人―木田橋喜代慎のLibrarianship―」と東京工業大学附属図書館事務部長若月修氏による「電子図書館化の推進について」の講演があり，道内の国公私立大学，高等専門学校及び本学図書館職員から約60名の参加がありました。

資料紹介

矢田俊隆名誉教授の蔵書の寄贈について

法学部教授　**田　口　　晃**

本学の名誉教授矢田俊隆先生はわが国におけるドイツ史研究の泰斗であられ，とりわけ大著「ハプスブルク帝国史研究」などの業績を通じハプスブルク帝国史研究の第一人者として歴史学の分野で令名を博してこられた。昨年暮，永年収集してこられた個人の蔵書を北大に寄贈したいというありがたいお申出があった。ただ，周知のように本学の図書館は収納の余裕に乏しいため，全蔵書をお引き取りする分けには行かず，未蔵のものだけを頂戴したい，と聊か虫のよいお願いをしたのであったが，快く御理解をしていただいた。当初は和書も含め400点程を寄贈して下さるとのお話しであったけれども和書は重複が多いので洋書のみとさせて貰った。お送り頂いた288点から重複分を除き，最終的に本図書館に寄贈していただくことになったのは計165冊である。図書の種類を見ると，主要なものはメッテルニヒ関係の文献から始まって，ハプスブルク王家史，ドイツ語圏やハンガリーもふくむ1848年革命を対象としたもの，ハプスブルク帝国の再編所謂「アウスグライヒ」に関わるもの，あるいはオーストロ，マルクス主義として名高い社会主義運動関連文献，さらにはハプスブルク帝国の崩壊の研究，史料に至るまで，ハプスブルク帝国史の様々な時期と分野をカヴァーしている点に最大の特色がある。その他共和国になってからのオーストリアやドイツ史，東欧史の研究書も含まれている。特に1970年以前に出版された書籍に本学図書館に漏れており，しかも今日では入手困難な貴重な文献が多く含まれているのであり，これにより，北大図書館は日本有数のハプスブルク帝国史関連蔵書を持つことになる。蔵書の充実を喜ぶとともに，矢田先生に心から感謝いたしたい。また関係各位にもお礼を申し上げる。配

架は混配となるが，インターネット上では一つにまとめて掲載する予定だと聞いている。御関心の向きは一度のぞいて見てください。

教官著作寄贈図書

1999.1.1～1999.2.28

［本　館］

（法学部）

木　佐　茂　男（編著）自治立法の理論と手法（分権時代の自治体職員3）
ぎょうせい　1998

瀬　川　信　久（共著）民法判例集担保物権・債権総論　有斐閣　1998

鈴　木　　賢（共著）現代中国法入門（外国法入門双書）　有斐閣　1998

（名誉教授）

東　　晃　　雪と氷の科学者・中谷宇吉郎　北海道大学図書刊行会　1997

ご恵贈誠にありがとうございました。今後とも図書館資料充実のため，皆様のご協力をお願いいたします。

会議（11.1.1～11.2.28）

【学　外】

◎平成10年度国立大学附属図書館事務部長会議〈1月21日(木)〉（三重大学）

◎日米間におけるドキュメント・デリバリー・サービスの改善に関するラウンドテーブル
〈2月8日(月)～10日(水)〉（東京ガーデンパレス）

◎北海道地区国立大学附属図書館事務（部・課）長会議〈2月26日(金)〉（北海道大学附属図書館）

◎平成10年度北海道地区大学図書館協議会第1回幹事館会議〈2月26日(金)〉（北海道大学附属図書館）

北海道大学附属図書館報「楡蔭」(ゆいん)　**通号103号**

発 行 人　附属図書館事務部長　尾崎　一雄

編集事務　五十嵐哲郎・高田昌浩・佐藤　剛・首藤佳子・小林真木子・中村　陽・杉田茂樹
片桐和子・伊藤ますみ・久米未希子・佐々木圭・平田栄夫・小林流美子・加我順一

発 行 所　北海道大学附属図書館　〒060-0808　札幌市北区北８条西５丁目
TEL 011-706-2967, FAX 011-747-2855
ホームページ：http://www.lib.hokudai.ac.jp

印 刷 所　㈱アイワード